

【助成 40-66】

自閉スペクトラム症児を支援する大学生に対するヒデュン・カリキュラムの効果

研究者 星美学園短期大学 准教授 渡邊孝継

〔研究の概要〕

本研究では、将来自閉スペクトラム症(以下, ASD と表記)児への対人援助職を志望する大学生を対象として、臨床発達心理領域のヒデュン・カリキュラムを開発することを目的とした。2022 年度から心理系学部に通い、臨床発達心理学を学び、卒業後に ASD 児の対人援助職を志望する大学生5名と大学院生3名に、ASD 児の行動変容を引き起こす上で必要な専門能力(知識とスキル)を促進する教育プログラムを作成し、実施した。2名の ASD 児への支援プログラムの実施と、事前・事後の事例検討を含む打ち合わせを行う教育プログラムを実施した結果、応用行動分析に関する知識が獲得されること、特に、応用行動分析に関する知識の変動が大きかった大学生・大学院生は、支援プログラムを経験するに連れて、ASD 児の行動や発言の意図の推測の種類と数が増加することが明らかとなった。

〔研究経過および成果〕

研究目的

自閉スペクトラム症(Autism Spectrum Disorder:以下, ASD)児を援助する職に就くことを志望する大学生は、学外のボランティアなどに積極的に参加する。しかしその場合、ASD 児と関わる体験を得ることができても、スーパービジョンが脆弱であり、大学生は悩みや困り感を抱え易い。この点を解決するために、海外の医学教育システムでは、ヒデュン・カリキュラム(Hidden Curriculum)と呼ばれ、一定の歴史がある手法を用いている。それは、正課外で行われ、大学生の専門能力の開発に強力な影響を与える学習形態の一型をなしている。以上をふまえ、本研究では将来対人援助職を志望する大学生への臨床発達心理領域のヒデュン・カリキュラムの効果を検証することを目的とする。具体的には、大学生が ASD 児の行動変容を引き起こす上で必要な専門能力を促進する教育プログラムの効果を検証することを目的とした。

研究成果

〔方法〕参加者は X 大学の心理系学部の3年生3名と4年生2名と修士1年生3名の合計8名であった。なお、参加者 C は、療育施設でアルバイトを行っていた。

支援プログラムは、30 分の事前の打ち合わせと 50 分の ASD 児への支援プログラム、30 分の振り返りで構成された。参加者全員の主な活動は、支援プログラムへの参加と行動観察、記録であった。支援プログラムは、1 年を通して、合計で 16 回実施された。振り返りは、X 大学の応用行動分析を専門とする教員がスーパーバイズを行った。

研究開始前、終了後に参加者全員へ応用行動分析に関する知識を測定する KBPAC の簡易版を実施し、評価点の変動を検討した。また、支援プログラムごとに、参加者は学習した内容を自由記述した。支援プログラム前期、後期で、テキストマインニングを用いて、共起ネットワーク分析を行い、支援プログラムの効果を質的に分析した。

(結果)

参加者	学年	経験年数	pre	post	変動値
A	3年	1年	9	12	3
B	3年	1年	18	21	3
C*	3年	1年	20	21	1
D	4年	2年	12	18	6
E	4年	2年	17	21	4
F	修士1年	3年	17	18	1
G	修士1年	3年	19	16	-3
H	修士1年	1年	12	20	8

表 1 KBPAC の評定値の推移

変動値は、post の評定値-pre の評定値の数値を示している (表 1)。ASD 児への支援プログラムの反復参加を実施した結果、変動値は、参加者 G 以外が 1～8 上昇し、参加者 G のみ 3 下降した。参加者の KBPAC の評定値の平均は pre で 15.5、post で 18.375 であり、その差は 2.875 であった。

参加者の支援プログラムごとの自由記述では、前期分において、「対象児」、「好み」、「話」、「学ぶ+できる」、「先生」、「SV」、「事後ミーティング」などの単語の繋がりが示された (図 1 の左側)。後期分においては、前期分に加えて、「特徴」、「変化」、「社会性」、「発言」、「思う」、「行動」、「視点」などの単語の繋がりが示された (図 2 の左側)。

参加者の KBPAC の評定値は、1 名を除いて上昇傾向であったことから、支援プログラムへの反復参加は、応用行動分析の知識を向上させると指摘された。参加者 A・B・D・E・H は変動値が 3 以上となったのは、経験年数が 1～2 年であり、未獲得の知識を得たことが要因であると考えられた。参加者 C の変動値が 1 であることは、本研究開始前から参加していた、療育施設でのアルバイト経験が影響している可能性がある。また、自由記述のネットワーク図を前期と後期で比較すると、対象児の行動や発言、特性に関する抽出単語が増

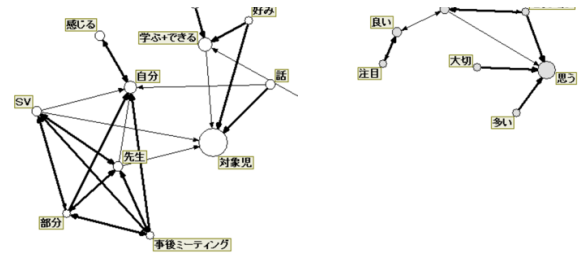


図 1 自由記述の共起ネットワーク図 (前期)

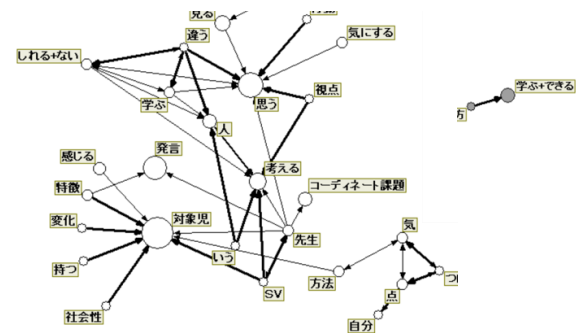


図 2 自由記述の共起ネットワーク図 (後期)

加した。このことから、支援プログラムの反復参加は、対象児の行動や発言の意図の推測・読み取りの数と種類が増加することが明らかになった。参加者は、自発的に対象児の見立てを行い、仮説を生成するようになったと推測された。以上のことから、対人援助職を志望する大学生への臨床発達心理領域のヒデユン・カリキュラムは、ASD 児の行動変容を引き起こす上で必要な応用行動分析の専門能力を促進する効果があると指摘された。

[発表論文]

1. 渡邊孝継(2023) ASD 児を支援する大学生へのヒデユン・カリキュラムの効果—応用行動分析の知識の変容に関する分析—. 日本特殊教育学会第 61 回大会(横浜国立大学). ポスターP3C-4.
2. 渡邊孝継(2023) 保育者養成校の大学生へのスタッフトレーニングの効果—活動プログラムへの参加により習得される応用行動分析の知識の分析—. 日本人間関係学研究* 査読あり